

### 三、女たらし

瓊瑋あいくんの郊外で、井口元伍長を自らの手で「処刑」してから半月後。

私はウラジオストックにある日本総領事館の駐在武官室に、伊東大尉を訪ねていた。

「一時帰国したいのか？」

「そうなんだ。二週間ほどいい」

私は、「休暇」の申請と、船の切符や旅券など必要書類の手配を依頼した。それらの書類を短期間で揃えられる組織は、この動乱の大陸においては外務省の出先機関である領事館ではなく、軍の駐在武官なのだ。

伊東は、「わかった」と頷いてから問うた。

「家族に何かあったのか？」

「私じゃない」

私は首を振った。

「例の水野ハナが、是非一度、郷里を訪ねたいというのだ」

「ほう」

伊東大尉は身を乗り出した。

「馬賊と繋がりのあるという女だろう。もう、ものにしたのか。見かけによらず、手が早いな」

私は曖昧に頷いた。伊東大尉は笑って言った。

「わかった。君の家族に知られても面倒だろうから、隠密に手配してやろう。せいぜい可愛がって、いろいろと手助けしてもらおうようにするんだな」

翌日になったら旅費と必要書類を受け取りに再訪する約束をして、私はウラジオストック市内のホテルに戻った。

三階の部屋の扉をノックすると、ハナは顔を出した。

「明日までに、伊東大尉がすべて手配してくれる」

と告げると、頷いてドアを閉めた。私は、その向かいの部屋に入った。言うまでもなく、私たちは別々の部屋に寝泊まりしている。

十日前、井口元伍長を殺害した後、瓊瑋あいくんに戻った私にハナは、

「一緒に、日本に行こう」

と言った。帰ろう、ではなく、行こう、という言葉はハナは使った。

「日本に？」

「橋口平助を、処刑する」

井口元伍長らと、ハナの親友だった三原ユキを犯した元一等卒だ。井口によれば、橋口は勲章を賜り、郷里の静岡に帰還して村一番の金持ちの娘婿むこになったという。

その橋口を、静岡まで追いかけて「処刑」するということだ。

「どうしても、やるのか」

そう問うと、ハナは

「やる」

と答え、そして言った。

「日本に行くには、船の切符や旅券を手配しなければならない。それには、お前の協力が  
必要だ」

満州やシベリアを旅するのならば、ハナの裁量で偽造旅券や切符を用意できる。だが、  
日本行きとなると、女の一人旅というわけにはいかない。必ず、怪しまれる。夫婦か、あ  
るいは姉妹か、家族連れという形をとり、正式の旅券を得るほうが何かと都合だ。

私は承知した。ハナに従うことは、まったく苦くではなかった。

「日本の着物は久しぶりだが、こんなに不自由なものだったなんて、忘れてたよ」

ウラジオストックを出航した汽船の一等船室で、ハナは苦笑した。

「裾すそが乱れるから走ることもできない。纏足てんそくと一緒だ」

纏足とは、中流以上の支那人女性が幼児期から施される風習だ。足を包帯できつく縛っ  
て大きくならないようにする。身体は成長しても、足は幼い時のままなので、歩くときは、  
つま先立ちのように膝を曲げた不安定な姿勢になり、走る事もままならない。野蛮な風習  
として欧米から批判されていた。

ハナがふだん身に付けている満州服は、足首まである長いスカートかズボンだ。男のよ  
うに大股かっぱで闊歩するハナにとって、小股で歩かねばならない和服は纏足と同様、女性の高  
度を縛り付ける男尊女卑の弊風だというのだ。

「女が自由に走ったり、旅したりするのを嫌いやがって、あんな野蛮な風習を押しつけたんじ  
やないかな。支那の男も、日本の男も、了りようけん見けんが狭いよ」

まるで女権論者フェミニニストのような事を言う……。私は苦笑したが、一面、真実をついているかも  
しれない。

ウラジオストックを出航した船は、まず朝鮮の釜山港に立ち寄り、それから神戸港に入  
る。そこからは汽車で静岡へと向かうことになる。

「ソヒョンも連れてくればよかったかな」

ハナは、寝台に腰をおろし、航路案内図をめくりながら咳つせいた。

「あの子、朝鮮には行ったことがないそうだから」

「そうなのか？」

「ロシアには昔から朝鮮人が大勢入植していて、ソヒョンのお母さんは、そんな朝鮮人の  
家に生まれたの。貧しさから一家離散し、ソヒョンのお母さんは身体を売りながら、流れ

流れてブラゴベシチェンスクに行き、そこでコサック兵と恋に落ちて、生まれたのがソヒヨンなんだ」

「そうだったのか」

そのソヒヨンがなぜ、ハナの経営する聚英棧ヂーイェンチェンの小間使いをしながら、瞬時に人を殺す恐ろしい技を身につけているのか。

そう聞いたかったが、ハナがみずから打ち明けるのを待った。

そんな私の気持ちに気づいたのか、ハナは私を一瞥いちべつし、眼を伏せて寂しそうに笑い、それから口を開いた。

「六年前、旅順で世話になっていた林リンさん夫婦が井口たちに殺され、ユキをさらわれた後のことは、話してなかったね」

「そうだな」

「その後、あたしは旅順を飛び出して、放浪の旅を続けた。すぐお金がつきちまって、ひもじくて、しんどくて……で、あたし、どうしたと思う？」

「さあ……？」

「たまたま出会った、日本人が飯を食わせてくれた。どうせ下心があるんだろうと思ってたら、やっぱりだった。そいつ、日本の右翼の大立者から大金をもらって、軍事探偵として情報を集めてるんだと威張ってた。大陸浪人って奴さ。財布の大金を見せびらかしたのが運のつき。そいつ、あたしと寝たがってたから、承知したふりして、いよいよって時に、きんたま、握り潰してやったんだ」

私は驚いた。男の急所を蹴り上げ、平然と去勢するハナだったが、それは馬賊として修羅場をくぐった賜たまものだと思っていたのだ。

自嘲するように唇を歪ゆがめて、ハナは続けた。

「そいつの金を奪って、旅を続けた。因果なものだね。一度覚えた味は忘れられない。金がなくになると、金のありそうな男を誘惑し、きんたま潰して殺し、金を奪ってまた旅を続ける。そういうしているうちに、宋紀ソンキと出会った」

不意にハナは、私に笑顔を見せ、言った。

「知ってる？ あいつ、実はきんたま一個、ないんだよ」

「え？」

「あたしが潰しちゃったから」

ハナの部下の馬賊である宋紀の、雲をつくような長身や、いかつい髭面ひげづらを思い出した。

あのハナに忠実に仕える大男が、鞆丸をひとつ、よりによってハナに潰されていたとは。

ハナは語った。

「支那人のひひじいじいに、屋敷に連れて行かれた。もちろん、きんたま潰して金を奪う目的だったけれど、その屋敷に馬賊が襲いかかった。危うくあたしも殺されそうになったから、必死で馬賊のきんたま掴んで握り潰した。そいつが、宋紀だったんだよ」

啞然あぜんとして聞いている私の顔を、おかしそうに見ながらハナは続けた。

「馬賊たちは、よってたかかってあたしを押さえつけ、殺そうとした。ところが、首領の高老爺カオウオウオンが、あたしの命を助けてくれた。見所みどころがあるからと、宋紀にあたしを鍛きたえて仲間にするよう命じた。馬賊の掟おきてでは、首領の言いつけは絶対。宋紀は、ずいぶん骨を折ってあたしを一人前の馬賊にしてくれた。半年後には、あたしは仲間の馬賊と一緒に暴れ回るようになった。ずいぶん手柄を立てて、調子づいてた、そういう時に……」

ハナは、天井を見上げ、溜息をついた。

「あたしは、ソヒョンと出会ったんだ」

……五年前。

十五歳のハナは、数名の配下を付けられ、単独行動を任されるまでになっていた。

その日、ハナは高老爺カオウオウオンの命令で、宋紀ら四人を率いて瓊瑋あいくんから三日の距離にある山寨さんさいを出発した。数日前から、近くに見かけぬ集団が居いているという噂が流れてきた。どんな人々の集まりか、探るのが任務だった。

——食い詰めた流れ者ならいいが、ひよっとしたら、わしらを討伐するため遣わされた連中かもしれん。しつかり探ってきてくれ。頼むぞ。

そう首領に言われ、ハナは勇躍、馬を走らせた。

だが、目的地である湖のそばに到着したハナは、愕然がくぜんとなった。粗末な天幕テントが二つ張られたそばに、十人ほどの死体が散らばっていたのだ。

みな、銃弾を浴びていた。朝鮮人とロシア人の集団で、農機具を携えていた。新たな土地を求めて流れ歩いている農民の集団と察せられた。飢えた馬賊に襲われ、食糧や金品を奪われたのだろう。

馬から降りたハナは、宋紀ら部下たちに、まだ息のある者がいないか調べさせながら、とある天幕を覗いたとたん、なから銃声が響いた。

弾丸が空気を切り裂いて、危うくハナの肩先をかすめた。ハナは飛びすさり、構えていた拳銃で反撃しようとして、立ちすくんだ。

天幕のなかには、七歳ほどの少女が、小銃をこちらに向けて立っていた。その足下に、死体が二つ、横たわっていた。

青ざめた面差しで、銃口を向けてくる少女に、ハナは必死で叫んだ。

「不要 槍 殺（撃つな）！」

幸い、少女は小銃をおろし、そのまま気絶した。

命を取り留めていたのは、その少女だけだった。少女のいたテントにあった二つの死体は、母親らしい朝鮮人女性と、父親と思われるロシア人男性だった。他の死体と同様、銃弾を浴びていた。

少女は、粗末な布で仕立てたチマ・チョゴリを身につけていた。チマ（スカート）の腰のあたりに、名札が縫いつけられていた。ハンブルで「エロソヒョン」と墨書されていた。

「それからあたしは、ソヒョンを引き取って、馬賊に必要な技わざを教え込んだ。ソヒョンは勘かんのいい娘で、みるみる上達した」

高老爺カオラオヤウセンの命令で、ハナが環瑛アイゲンに聚英棧チーインチアンという客棧クワイチアン（旅館）を開いたのは、その二年後だった。もちろん、環瑛を根拠に、様々な情報を集めるためである。

ソヒョンは小間使いとして客棧クワイチアンの雑務をこなす一方で、情報収集にも長けていた。武術だけでなく、ハナの右腕として欠かせない人材に成長したのだ。

「彼女の両親が殺された事は、去年、打ち明けた。ソヒョンはけなげにも、ハナオンニ（ハナお姉ちゃん）がいるから大丈夫だと言ってくれた。そのあとで、一人きりになって泣いていたみたいだけど」

ハナはそう言い、手の甲で溢れ出た涙を拭ぬぐった。

神戸港に降り立った私とハナは、汽車を乗り継いで静岡駅に着いた。橋口平助は、静岡市から歩いて半日のところにある調布村チヨウフの村長の入り婿むこになっていることは、井口虎吉から聞き出していた。

静岡市内の旅館に一泊して疲れをとった私たちは、用意した行商人の服に着替え、調布村へと向かった。

だが、街道沿いの茶店で、意外な話を聞いた。ハナが茶店の主人に、

「この先の調布村に、勲章貰った兵隊さんがいるそうだね」

と問うと、主人は顔をしかめて、

「ああ、あの平助とかいうろくでなしか」

と吐き捨てるように言い、

「その野郎、村長の娘婿になると約束しておきながら、一稼ぎしてくるからと東京に出て行って、小金こがねもった女をだまくらかして金を引き出し、一攫千金いつかくせんぎんを狙って外国にいつちまったださうですぜ」

私とハナは顔を見合わせた瞬間、

「なんだってー！」

店の奥から、女の絶叫が響いた。

声のした方を見れば、色白で愛嬌のある顔をした、大柄で小太りの若い娘が、茫然と立ちつくしている。

「おい、親父、それ本当け？」

裾すその乱れも気にせず頑丈がんじょうそうな脚を動かして、娘は、茶店の主人に詰め寄り、胸ぐら掴んでゆすぶった。

「だ、誰だよ、あんた？」

茶店の主人は、娘の手を払おうとしたが、娘はそうとう力が強いらしく、微動みどうだにせず親父を壁に押しつけた。

「今の話、ほんとうか？」

ますます締めあげられ、茶店の主人は、ごぼごぼと噎むせながら、う、うそじゃねえ……と呻うめくのがやっとだった。

「嘘つくなー！」

娘はいきなり、茶店の主人の股間を蹴り上げた。主人はのけぞって、両手で股間を抑えて倒れ、立つこともできない。娘は、

「うらの平助さんが、そんな事するもんか、この嘘つき！」

と、主人の背中をさんざん踏みつけ、わあああ！！とわめきながら、店の外に飛び出した。

「あたし、あの娘の後を追う！」

黙って見ていたハナが、啞然あぜんとしてなりゆきを見守っていた私に言った。

「先に宿場に行つて、旅館をとつておいて！」

娘が駆けだした方角に走り出した。

私は、茶店の主人を介抱した後、宿場町まで歩き、なるべく清潔そうな宿を取った。

三畳の部屋で、一人ぼつねんと待っていると、日が暮れかけた頃、廊下にどやどやと賑やかな足音や笑い声が響き、

「連れてきたよ」

「こんにちわあ」

ハナと、さきほど茶店で騒ぎを起こした大柄な娘が仲良さそうに入ってきた。

「うら、沢口静枝さわぐちしずえと申します。さつきはみつともねえところ見せちまったずら。申し訳なかつたです」

大柄な娘は、ぺこりと頭をさげた。それから、やまかしく自己紹介を始めた。

静枝は、山梨の清水村という、調布村から歩いて一日離れた里の百姓の家に生まれた。

同じ村の秋山八郎あきやまはちろうという青年と結婚した。ところが新婚早々、日清戦争が勃発し、秋山も召集されて従軍、旅順要塞戦で戦死したのだという。

「旅順？」

ハナの友人である三原ユキが、井口虎吉や橋口平助らに陵辱された地である。静枝は続けた。

「敵と戦つて壮烈な戦死を遂げたそうです。夫と仲良しだったという橋口って調布村出身の兵隊さんが、四年前、わざわざうらを訪ねてきてくれて……」

「橋口？」

私は思わず、ハナを見やった。戦死した静枝の夫は、旅順で橋口と戦友だったというのか……。

ハナは、すでに経緯を聞いているらしく、静かに頷くだけだった。

「戦地での夫の勇敢な戦いぶりだとか、いろいろ、教えてくれたんずら。それからも、何かとうらの事を気づかってくれて、で、二年前に……」

静枝は頬を赤らめてうつむいた。男女の仲になったということなのだろう。

「んで、うらはてつきり、平助さんが嫁に迎えてくれるもんだとばかり思ってたけど、平

助さん、一年前、東京で一稼ぎすると出てっから、手紙一つ寄越さねえ。痺れを切らし  
て、調布村の平助さんの実家を訪ねて聞いてみようと思つて、ここまでやってきたら、あ  
の親父があんな出鱈目言うもんだから、つい……」

「それで、どうするの？」

ハナは訊ねた。

「今日はまだ遅いけれど、明日にでも調布村に行く？ あたしたちも調布村に行く予定だ  
つたから、ご一緒してもいいよ」

「それは有り難いけど……」

静枝は躊躇っているようだった。実際に、橋口の家族や友人たちに会つて、本当のこ  
ろを聞くのが怖かつたのではないか。

ハナはそれを察したように言った。

「じゃあ、あたしが調布村に行つて聞いてきてあげるよ。静枝さんは、ここで待つてて。  
話を聞いたら戻つてきて、ちゃんと教えるから」

静枝は驚いて、そんなことまでさせては悪い、と恐縮していたが、やがて承知した。

翌朝、ハナは私を連れて、調布村へと向かつた。

調布村で驚いたのは、橋口平助の実家の、あまりの貧しさだった。村はずれにある掘っ  
立て小屋同然の陋屋に、父親と兄二人の三人暮らしである。髪はぼうぼう、汚い恰好で野  
良仕事の準備をする男所帯の三人を見たハナは、彼らを訪ねる前に村人たちの評判を聞こ  
うと、広場で商売を始めた。

貧しい村の住人にとつて、郵便配達夫や行商人は、外の世界の空気をもたらしてくれる  
貴重な存在だ。たちまち私たちは取り囲まれ、商品は飛ぶように売れた。

私は、ずっと黙っているよう、ハナから命じられていた。士族あがりの軍人の口調を変  
えられぬ私が口を開いたら、行商人ではない事がばれてしまう。

私が無口なふりをして品物をさばいている間、ハナは巧みに、村人から橋口平助に関す  
る情報を聞き出した。

平助さんが戦いで手柄を立てて勲章もらつてから、あの家も運が向いたと言われてたの  
になあ……。

村長さんとこの秀子お嬢さんに婿入りが決まっていたずら。秀子さんは東京の女学校に  
入つていて、卒業したら村に帰つて平助さんと結婚する手はずだったけど、平助さんは、  
東京で金持ちの女ごを騙して金をせしめ、秀子さんと一緒に支那にとんずらしちまった。  
村長さんはかんかんに怒つて婚約は解消、約束していた援助の話も立ち消えになつて、  
平助の一家はますます貧しくなるばかり……。

「橋口平助という男、よほどの女証しだね」

村を出て、街道を歩きながらハナは無然として言った。

「出会う女を片っ端からものにして、都合が悪くなつたら捨てる。許せない奴」

「しかし……」

私は、宿屋で待っている静枝が不憫ふびんに思われ、問うた。

「ありのまま、彼女に伝えるつもりか？」

「もちろんだよ」

ハナは言った。

「あんなろくでなしに惚れちまった自分の馬鹿さ加減に気づかせてやるのが、ほんとうの親切だ。泣こうがわめこうが、知ったこつちやないさ」

だが、案に相違して、ハナから話を伝えられた静枝は冷静だった。

「やっぱり……」

静枝はうつむいたまま、お世話かけちまって申し訳ねえすら、と頭をさげた。

「それで、あんたこれからどうするの？」

ハナは問うた。

「故郷に帰ったほうがいいんじゃない？」

「いえ」

静枝はきつぱりと言った。

「うら、東京に行きます」

「え？」

ハナは驚いて問うた。

「東京で何行つてどうするの？」

「平助さんがどこに行つたか、知ってる人を探さんずら。平助にお金をだまし取られた女の人とか、村長さんのお嬢さんが通つていた女学校とか、誰か知ってる人がいるはず」

「知つて、どうするの？」

「うらも、支那に行くずら」

私はハナと顔を見合わせた。ハナも啞然じょうぜんとしている。

うつむいていた静枝は顔をあげ、頬ほを上気じょうきさせて言った。

「うら、やっぱり納得いかねえ。平助の奴とつかまえて、あらいざらい問い詰めるずら。

うらの事どう思つていたのか、最初からだますつもりだったのか、それとも……」

「よしなよ」

ハナは冷たい口調で言った。

「ろくでもない女証たてましのために、女一人で大陸に渡るだなんて。いや、東京だって、あんたみたいな世間知らずの田舎者、すぐ騙だまされて危ない目にあうよ」

「大丈夫ずら」

静枝はいきり立った。

「うら、小さい時から喧嘩で男に負けた事なんかねえ。さつきみたいに……」

そう言つて言葉を切り、流れ落ちた涙を拭ぬぐった。

「すぐ、男のきんたま蹴つて泣かず、うらみたいな女を、秋山の八郎さんは嫁よめにしてくれ



て、とても大事にしてくれました。それなのに、あんな男に騙されたうらは、恥ずかしいし、死んだ亭主に面目が立たねえ……」

「わかった」

ハナは、何かを思いついたように私に目配せし、ぼろぼろ泣く静枝の肩に手をかけた。

「品物もぜんぶ売れちまったし、そろそろ東京に帰ろうと思ってたんだ。一緒に行つてあげる。ついでに、橋口平助のことも調べてあげるよ」

「ほんとか？」

眼を輝かせた静枝に、ハナは、私を指して言った。

「この人も、あんたの亭主と同様、清国との戦に出征したんだ。軍人仲間も多いし、つてもある。大丈夫、任せときな」

「わあ、それはありがたい事つてごいす！ よろしゅうお願いします！」

目の前で土下座され、私は頷くしかなかった。

東海道線で静岡から東京に移動した私たちは、新橋駅近くに宿を取り、翌朝、私は背広に、ハナは京友禅の着物を身につけた。きちんとした身なりでいかないと、先方は真剣にとりあつてくれないとのハナの助言に従つたのだが、静枝は私たちを見るなり、眼を丸くして驚いた。

「あらあ、なんだか、ええ家のご夫婦みたいだあー」

と驚いた。ハナは、私の腕を掴んで、

「実はこのひと、元陸軍中尉なんだよ」

と言つた。静枝は驚いて、

「え、中尉つていえば、偉い人なんじゃ？」

と問うと、ハナは落ち着き払つて、

「そう。でも、陸軍は肌にあわないと辞めちゃつて、あたしと同じ行商人になつたの」

「ほんとか？」

静枝は眼を丸くして、まじまじと私を凝視していたが、不意に私の両手を握り、

「偉い！ ほんと偉い！ 嫁のために軍人さん辞めただなんて、素敵。平助に聞かせてやりたいぞら！」

とはしゃいだ。

まずは、平助が駆け落ちした調布村の村長の娘・秀子を通つていた牛込（現、新宿区）の旭高等女学校を訪ねる事にした。秀子の担任教師が会ってくれた。

「秀子さんには、正直、手を焼いてましてね」

若い担任教師は洗いざらい喋つた。よほど腹に据えかねていたのだろう。

「学校では、ひどく無口で、友だちもいないような娘でしたが、外では変な不良少年と付き合つたり、浮いた噂が絶えませんでした。挙げ句の果てに駆け落ちなんか……。郷里から親御さんがいらして、うちの娘をちゃんと教育しないからだ、とさんざん詰られました」

けれど、ろくな躰しづけもしないでにおいて、何を言ってるんだか……」

愚痴りながら教師は、写真帳を取りだし、生徒の集合写真を見せてくれた。袴を着け、当時女学生の間で流行した庇ひでがみ髪かみに結ゆった秀子は、口をへ、の字に結むんで俯うつむいており、どんな面差しなのか、よく分からない。

秀子がどうやって平助と知り合い、どんなつてをつたって大陸に渡ったのかは分からなかったが、担任教師は、平助が勤めていた車屋を教えてくれた。平助は東京に出て、いろいろな職を転々とした挙げ句、人力車夫になっていたので。

教えられた車屋を訪ねると、五十がらみの主人が出てきた。

「平助の野郎、働はたらきが悪くて、ちよつとでも体がつれえと休やすみたがつて、とんだろくでなしでしたが、なぜか女にはもてる奴やつでしてね、女のお客さんと幾度も騒さわぎを起おこしているんです。なんでも、どこかの二号さんとねんごろになっちまった挙げ句、その女の財産ざんを掠さらめとつて、どろんしやがったんです。女が店にまで怒鳴り込んできて往生おうじょうしましたぜ」  
吉原の大鳥神社近くに、春美という名のその女は住んでいた。訪ねてみると、三十路手みそじ前の、小柄こがらでほっそりした、色っぽい女だった。

「ああ、あいつね……」

春美は吐き捨てるように言った。

「あの野郎、あたしが旦那から教おしわった株もで儲もうけた金で、一緒に海外に渡って一旗あげようなんて言いってたくせに、他の女と逃げやがった。旦那にばれて縁切りされちまうし、ほんと、思い出おもしたくもないよ。また男を見つけなきや、干上ひあがっちゃう。ねえ軍人さん、どなたか紹介しょうかいしていただけませんかね。お礼はしますよ」

「このすべた！」

いきなり、静枝が春美を平手打ちした。

「なにすんだい！」

春美は激怒し、静枝につかみかかった。静枝は、春美の髪を掴つかんで、

「困こいのくせに、あたしの平助をたらし込んでおいて、何言いってるすら！ 泥棒猫！」

と、お尻しつぽを蹴くつ飛ばした。地面ぢめんにくずおれた春美、

「うるさい、お前まへみたい田舎女いんやめにや分からないんだ！」

と怒鳴り返し、わつと泣き出した。

「ちよつと、静枝さん」

ハナは呆おろれたように、肩かたを振ふるるわせて興奮する静枝をなだめた。

「まだ聞きかなきやならないことがたくさんあるのに、やめなよ」

「考えてみりや、あたしら仲間だねえ」

春美の家にあがり、座敷で茶を飲のんでいるうちに、さきほど喧嘩騒けんかさわぎを展開した二人の女たちも、しだいに冷静れいじやうさを取り戻もどし、しまいには同病相哀どうびやうあれむように、慰なぐさめあった。

「どう考えても、働はたらきのない女証めいじしに惚ほれちまって、同じ被害ひがい者ものみたいなものに、掴つか

みあいの喧嘩までしちまって、みっともないったら、ありやしない」

「ほんとうに、申し訳ない事ことっでございす」

静枝も頭をさげた。

「皆さんのお話をうかがえばうかがうほど、あんな男に惚れ込んでいたあたしが恥ずかしくなるばかり。こうなったら、なんとしても、あの男をとつかまえてやんなきゃ、気がおさまらねえぞら」

「あの男とつかまえるって？」

春美は眼を丸くした。

「まさか、あんた、外国まで追いかけていくつもり？」

私も、そしてハナも、静枝に眼を向けた。

「もちろんでございす」

静枝は決然として言った。春美はさらに問うた。

「どうやって？ まさか、女一人で支那に行くってこと？」

「うーん」

静枝は、私とハナを見やり、恐縮した様子で問うた。

「今までさんざん、お世話になったけれど、まさか、外国までご一緒ってわけにはいかなえですよね？」

「そうね……」

ハナは静かに眼を伏せ、しばし考えていたが、ふと眼をあげ、静枝の顔を凝視した。

「で、あなたは橋口平助を見つけられたとしたら、いったい、どうするつもり？」

「え……？」

静枝は答えられなかった。そこまで考えていないようだった。

「そ、それは……その……」

「まさか、よりを戻したいと？」

「いえ、それは無ねえです」

「じゃあ、どうするの？」

ハナは、薄く笑って言った。静枝はしどろもどろに答えた。

「そりゃあ、とちめてやりたいと……」

「とちめるとは、どうやって？」

黙り込んでしまった静枝に、ハナは言った。

「私だったら、きんたま潰してやるわ」

静枝と春美は、眼を見開き、ぽかんと口を開いたまま、彫刻のように固まった。ハナは笑みを保ったまま、言った。

「女誑たちしにとつては、いちばん受けたくない罰でしょうね」

翌日、私は外務省に出向いた。同郷の知人が外交官として霞ヶ関に勤務していた。

久闊きゆうかつを叙した後、親戚の女性に頼まれて、橋口平助という元日本兵を探していると告げ、同名の者が海外に渡航した記録が残っていないか、調べてほしいと頼んだ。知人の外交官は、快く引き受けてくれた。

霞ヶ関を出て、新橋駅近くの旅館に戻り、部屋に入ると、ハナは独りひと、総合雑誌をめくっていた。

「おかえり」

と雑誌を閉じるハナに、外務省で平助の渡航先を調べてもらえることになった、と告げ、

「静枝さんは？」

と問うと、吉原に出かけた、という。

「また、春美さんに会って、女同士で話し合い、自分の気持ちを決めたいんだって」

ハナはそう言って笑った。

「それで……」

私は問うた。

「もし、静枝が外国行きを決心したら、一緒に橋口平助を探すことになるのか？」

「そうだね」

ハナは静かに答えた。

「あの女に、橋口平助のきんたまを潰させるのも、悪くないわ」

「どうしても、やるのかい？」

「当然だよ」

ハナはきっぱり言い放った。

「あたしの親友を手籠てごめにし、林リンさん夫妻を殺した一味なんだ。絶対に生かしてはおけない。罰を受けてもらう」

それから、眼つき鋭く私を見据えた。

「まさか、井口虎吉の、ほんとうはまじめな男なんだって言葉を真まに受けたんじゃないでしょうね」

「いや、そうじゃない」

私は否定した。

「ただ、井口の話や、静枝や春美との件を聞いていて思ったのだが、橋口平助という男、根っからの悪人ではなく、単に、他人から誘われたり、頼まれたりしたら断れないしょうぶん性分の、気の弱い男なんじゃないかと……」

ハナは、瞬まばたきもせず、私を凝視している。怒らせたかな……。気が咎とがめたが、途中で話を打ち切るわけにもゆかず、続けた。

「女誑たごしということだが、どうも私には、女のほうから惚れてきたのを、断ることができなかったのではないかと思われてならない。静枝と春美、そして秀子は、見た目も年齢も共通するところがない。橋口が好みの女を色仕掛けで誑たごしたのではなく、惚ほれられた女たちみんなを相手しているうち、始末がつかなくなって逃げたのではないか」

「だから、許してやれと言いたいのか？」  
ハナは、立ち上がり、私に詰め寄った。

「言いなりになっただけ、なんて言い訳は通用しないよ。手籠めにされる方の身にもなつてごらんよ！」

言うなり、いきなり私の睾丸を掴んだ。ぎゅつと捻ってハナは、私を押し倒した。馬乗りになったまま、睾丸を圧迫し続けた。

「女がむりやり犯される時、どんな気分になるか、教えてあげる」

仰向けに悶える私の喉を、手で押さえつけた。激痛で身動きできない。

「このまま、尻の穴にでかいものを入れられるって想像してごらん！」

「わ、わかった……」

私はやつと声を絞り出した。廊下で賑やかな声と、足音が聞こえてきた。

ハナは立ち上がり、再び雑誌を捻げ始めた。私は、部屋の隅に這っていき、やつと起きあがってあぐらをかいた。

「ただいま！」

がらりと襖が開き、静枝と春美が入ってきた。

「いやー今日は楽しかったぞ。春美さんに浅草に連れてってもらって、落語を聴いて、ジオラマ見て、お汁粉食べて、おでんにビールで乾杯して……」

そう静枝が報告すると、春美も相槌を打ちながら、

「いい気分になってたら、変な与太者たちに絡まれちゃったのよ。そうしたら、静枝さんが急所を蹴り上げて、二人ともやつつけちゃったの。すごかったわあ！ でかい男が、両手でまたぐら押さえて地面を転がって、痛い痛いって泣いてるのだから」

「きんたま蹴れば、男なんかいちころずら」

静枝は胸を張った。

「うら、郷里じゃ、男にも喧嘩で負けたことはなかったぞら」

春美は納得顔で頷き、

「あんただったら、外国に行っても大丈夫だよ。だから、ハナさん……」

二人は並んで、ハナに向かって土下座した。

「あたしたちを、連れて行ってください！」

「あたしたち？」

「はい」

春美が答えた。

「あたし、静枝さんが与太者のきんたま蹴り上げるのを見て、感動したんです。女だって男の言いなりになるばかりじゃだめだって。春枝さんと一緒に平助の野郎をとっちめて、生まれ変わりたいんです」

必死にかきくどく春美を見ていたハナは、やがて

「わかった……」

と、春美と静枝を見比べながら言った。

「で、見つけたら、あいつのきんたまを潰してやる？」

二人は顔をあげ、無言で頷いた。

この間、私は部屋の隅で、女たちに背を向け、声を押し殺して、痛みが去るのをひたすら待っていたのだった。

それから数日、私は伊東大尉の紹介状を携えて陸軍に掛け合い、ハナの雇い人という名目で、静枝と春美の海外旅券を用意するべく奔走した。その間、外務省から、橋口平助の渡航先に関する記録が出てきたとの知らせがあったので、赴いてみると、果たして橋口は、三週間前、「妻」とともに「商用」目的の旅券を携え、韓国へと発ったというのだ。三年前、朝鮮王は国名を大韓帝国と改め、自ら皇帝と称していた。

日清戦争で、朝鮮半島における清国の影響力排除に成功した日本は、経済面での半島進出を強めていた。かねてから計画されていた、朝鮮半島南端の釜山と首都京城を結ぶ鉄道建設の権利を手に入れた。以来、多くの日本人が、鉄道建設や駅周囲での商売を狙って続々と半島に渡航し、その数は年間で数千人に達していた。

「朝鮮ねえ……」

私の報告を聞いて、ハナは呟いた。

「本当に、ソヒョンを連れてくればよかったわ。いつそ呼び寄せられないかしら」

私は少し考えた。陸軍に頼んで、ウラジオストックに駐在する伊東大尉に電信で依頼することは不可能ではないが、多忙な伊東が、ウラジオストックから船で十日かかる環璣まで行き、ソヒョンに朝鮮まで来るよう伝えてくれるとも思えない。

ならばいつそのこと、環璣に戻り、改めてソヒョンを連れて朝鮮に渡るほうが、得策ではないか。

「それも、そうね」

とハナは同意した。

取り急ぎ切符を手配し、神戸から釜山を経由して、ウラジオストックへと向かうことになった。

明治三十三（一九〇〇）年の六月になっていた。

ウラジオストックに到着した私は、ハナ、静枝、春美、三人の女たちをホテルに残し、日本総領事館に向いた。

「よう、お帰り」

駐在武官室に入ると、伊東大尉が出迎えてくれた。

「どうだ。ハナさんは、郷里を見られて、喜んでいたか」

「ああ、まあな」

曖昧に言葉を濁しながら、私は手土産として神戸で仕入れた日本酒を取り出した。近年、販売が始まった一升瓶入りである。

「おお、これは懐かしい」

伊東大尉は、棚からグラスを二つ取り出し、灘なだの生きいっほん一本を酌くみ交わした。

「ところで……」

私は話を切り出した。ハナが、ソヒョンという雇い人の朝鮮人少女を、郷里の韓国に連れていきたいと言っている。軍のほうで旅券の手配をお願いできないだろうか。

「難しくはないが、貴様、少し甘やかしすぎじゃないか」

と伊東大尉は笑った。幸い、私の意図を疑うのではなさそうだった。

「それよりも、貴様には頼みたいことがあるんだ」

「なんだ」

「知っているか。ロシア軍の動きが怪しいのだ」

伊東大尉は説明した。

排外主義を掲げる義和団は次々と北京に入城しており、その数は二十万とも言われる。これに対抗して、イギリス、アメリカ、ロシア、フランス、ドイツ、オーストリア、イタリアの七カ国は、自国の軍隊を呼び寄せはじめ、日本もそれに倣なまった。それに対して清国政府が、義和団と手を結んで八カ国連合軍に宣戦布告するという噂うわささえある。

「実際、ブラゴベシチエンスクにロシア軍が集結しつつあるという情報もあり、対岸の瓊あいくん環わんでは清国軍の動きが慌あわただしくなったそうだ。すぐに赴おもむいてくれないか」

以後の連絡は、暗号を用いた至急電報を使ってくれ、と言われ、私はホテルに戻った。

ハナに、伊東大尉から聞いた情報を告げ、

「私はブラゴベシチエンスクに戻り、マラトフ大尉の家にしばらく滞在する。ハナさんは、瓊あいくん環わんに戻るのか？」

「そうだ」

ハナは答えた。伊東大尉の情報など、最初から分っているかのような態度だった。そういえば、女性だけの義和団員・紅ホン灯テン照アサの劉春燕が、ハナに接触するため、旅順からやってきたのだった。彼女は今、どうしているのだろうか。

「劉春燕なら、すでに瓊あいくん環わんを出た」

ハナは、こちらの考えを見抜いたように言った。

「高老爺カオラオウオヤンを紹介してあげたが、その後のことは知らない」

高老爺は、ハナが属する馬賊の親玉だが、劉春燕リウチンイエンがどのような意図で瓊あいくん環わんに来たのか、彼女が満洲馬賊に何を求めているのかは、決して口にしようとはしない。私も追求せず、話を変えた。

「静枝さんや春美さんは大丈夫だろうか」

いざという時、足手まといになるのではないかと案じたのだ。

「なんなら、このウラジオストックで、どこか働き口を斡あつせん旋せんしてもらおうか」

「あの二人が、橋口のきんたまを潰す計画を、誰かに漏らさないと安心してられるほど、あたし、彼女らを信用しちやいないんだ」

ハナは、さゝぎえとした眼差しで言った。

「だから、二人は連れて行く」

翌日、私たちは船に乗り、ウラジオストックを発った。

「С приездом Господин КИКУТИ (おかえり、菊池さん)！」

マラトフ大尉は、大きく手を広げて、私を出迎えた。ブラゴベシチェンスクで世話になつてはいたが、私が瓊瑋に行ったり、日本に帰ったりしているので、さほど長い間一緒にいたわけではない。ロシア人は人なつこく、その性を大袈裟に表現する。

「Вот я пришёлся домой (ただいま)」

両頬を合わせあうロシア式挨拶をかわした後、私はがらんとした家の中を見回した。夫人のリザヴェータや、二人の男の子カーチャとペーチャの姿が見えない。

「奥さんたちは、お出かけか？」

と訊ねると、マラトフ大尉は肩をすくめ、

「留守だ」

「買い物か何かか？」

「いや、ベロゴルスクにいる親戚を訪ねた」

ベロゴルスクは、ブラゴベシチェンスクの北東一〇〇キロメートルにある、人口数万人の都市だ。

コサツク軍将校の彼が、妻子をそんな遠くに遣つたという事は、いよいよ騒乱が近いのか？

私の疑念に気づいたように、マラトフ大尉は言った。

「菊池さん、君が日本軍のために働いていることは知っている。包み隠さずに、私の知るかぎりを言おう。義和団の手先が、このあたりまで潜入していることは、もはや公然の秘密だ」

さきほど、ブラゴベシチェンスクに着いて船を下りたとき、棧橋に、明らかに銃や砲弾、食料品などの軍需物資が荷降ろしされているのを眼にした。街中では、しきりとロシア兵やコサツク兵の部隊が右往左往している。明らかに、この街のロシア軍は増強されているのだ。

マラトフ大尉は続けた。

「われわれは、戦争をしたいわけじゃない。ただ、義和団に扇動された清国軍が、戦闘を仕掛けてくるかもしれない。備えないわけにはゆかないのだ」

その夜、マラトフ大尉に誘われ、コサツク軍団の兵営を訪ね、将校宿舍の食堂で夕食を振る舞われた。将校たちは、矢継ぎ早に質問を浴びせてきた。彼らが知りたかったのは、日本軍が大陸で何を目指しているか、だった。「君たち日本人は、朝鮮半島を奪いたいのか？」と直裁に聞いてくる者がいた。「満州は、ロシアと日本で山分けしよう」と言つて大笑する者もいた。



やがて、ウオツカの酔いが回った彼らは、一人の将校が奏でるアコーディオンに合わせて、腕を組んで背筋を伸ばしたまま、両脚を動かすコサック・ダンスを踊り始めた。私も日本の歌をうたえと強いられ、故郷のわらべ歌を披露したりして、夜が明けるまで酒と歌と踊りに付き合わされた。

明け方、私は、マラトフ大尉と肩を組んで、脚をふらつかせながら、家路をたどった。コサックの民謡を吠えるように歌う大尉に合わせて、歩いているうちにさんさん呑まされたウオツカが全身に回ってきて、ついに立っていられず、道路に座り込んでしまった。

「Ты в порядке (大丈夫か)?」

大尉は私に、右手を差し伸べた。私が、その手を掴もうとしたとき、大尉の顔が強張った。左右の手で股間を押さえ、膝をついた。

その背後に、赤い支那服の、背の高い女が立っていた。

劉春燕……!

立ち上がるうとしたが、からだが痺れたように動かない。

春燕は、うずくまったマラトフ大尉の襟首をつかんで頭をあげさせた。首を脇に抱え込み、鋭くひねった。頸骨の碎ける音が響いた。大尉の巨体はうつぶせに倒れ、動かなくなつた。

瓊瑋の裏通りで、春燕に不意打ちを食らった記憶が蘇った。殺される……。恐怖が私の身体から逃げようという意思さえ奪った。

春燕は、ゆっくりと私に歩み寄り、座り込んだまま震えている私の顔を覗き込むように腰を折った。

「我不会殺你的 (おまえは殺さない)」

切れ長の眼を細め、唇を歪めて笑い、ゆっくりと去っていった。

私は意識を失った。

翌朝。

マラトフ大尉殺害の報は瞬く間に広がり、ブラゴベシチェンスクに駐留するロシア軍は蜂の巣をつついたような騒ぎとなった。「義和団のせいだ!」という声が高まり、市内に在留する支那人との間の緊張感はますます高まった。

私は、ロシア軍憲兵の尋問を受けた。前夜、ウオツカを呑みすぎて酔っぱらったまま道を歩いていて、意識を失ってしまった。マラトフ大尉が殺害された現場は見えていない、と証言し、柳春燕の件は一切口にしなかった。幸い、前夜一緒に呑んで騒いだロシア将校も私の証言を裏打ちしてくれた。

二日後、ベロゴルスクから夫人のリザヴェータが、十歳のカーチャと八歳のペーチャ、幼い二人の息子たちを連れて帰ってきた。葬儀を終えたのち、夫人は子供たちを連れて実家に身を寄せる事となった。

夫人たちを見送ってから、私は瓊瑋に渡った。むろん、ハナに一部始終を伝えるため

ある。

船を下りると、街を囲む城壁の門があわただしい。槍を構えた清国兵が盛んに出入りしているのだ。すでに、マラトフ大尉殺害の報告が伝わっているのだろう。

聚英棧ヂョウエイケンに向かうと、

「きくちさん、안녕하십니까 (こんにちは)！」

道に飛び出してきて、ぺこりと頭を下げたのは、ソヒョンだった。

「ハナさん、いるかね？」

と問うと、

「いるよー」

と答えて、

「太太クワイクワイ(女主人)、きくちさん、だよ！」

となかに向かつて叫ぶと、

「あれ、お久しぶり！」

真つ先に飛び出してきたのは、静枝と春美だった。二人ともソヒョン同様、支那の小間使いのような髪型に服装だった。

見違えるような支那服姿に眼を丸くしていると、

「似合うぞらか？」

「あんまり見ないですよ。恥ずかしいじゃないの」

と、はしやぎまわる二人の背後から、ハナがゆっくりと現れた。

「入って」

と二階の一室に招き入れた。テーブルに向かい合って座り、ソヒョンが運んできた茶碗を受け取ると、

「誰も近づけないでね」

と言いつけた。ソヒョンは頷いて去った。

「殺されたコサック将校の事ね」

ハナは低い声で言った。私は頷き、包み隠さずすべてを話した。ハナは顔をしかめて首を振り、俯うつむいて呻うめくように言った。

「あの女……勝手なことを……」

唇をかみしめてがら、顔をあげてハナは言った。

「たぶん、お前の想像のとおりさ。柳春燕は、満州馬賊が義和団に協力し、ロシア軍と戦うよう頼みにきたんだ。高老爺カオラオウオウは、この地はすぐ近くまでロシアから鉄道が伸びていて、たやすく兵力増強できる、迂闊ウカフに動くわけにはいかなさ、とやんわり断った」

そこまで語って、ハナは唇を噛みしめ、しばし黙もたした後、眼を伏せて口を開いた。

「でも……少し不安だったんだ。あの女、ひどく思い詰めていて、とても納得してない顔だった。何かやらかすんじゃないかと思っていたら、とんでもないことに……」

両手で顔を覆って再び沈黙したハナは、やがて私を見詰め、瞬まはたきもせず言った。

「あたしは、高老爺カオラオウオンに会いに行く」

「どうするんだ？」

「こうなったら、清国の官吏も軍隊もあてにはならない。ロシア軍が攻めてきたら真っ先に逃げだすような輩やからばかりだ。自衛するしかないんだ」

高老爺カオラオウオンに頼んで、なるべく大勢の馬賊を呼び集め、避難民の保護や誘導にあてさせるつもりだ、とハナは言った。

「しばらく留守することになる。後は、ソヒョンたちに任せるけれど、お前は、ロシア軍の情勢を探ってほしい。少しでも怪しい動きがあったら、すぐに知らせに来て。あたしがまだ留守していても、残った子たちに必ず教えてくれ」

「分かった」

頷く私に、ハナは問うた。

「今回の件は、伊東大尉には知らせたの？」

私は首を横に振った。ハナは少し驚いて、

「なぜ？」

と問うた。私は言った。

「私が従う相手は、日本でも日本軍でもない」

思いがけずすらすらと、本音が出た。

「水野ハナという女だ」

ハナは、まじまじと私を凝視した。唇の端はしがゆがんだと思うと、お腹を抱えてけたたましく笑い出した。ひとしきり笑った後、不意に身を乗り出し、私の頬に唇を押し当てた。

驚く私に、ハナは眼を細めて言った。その目尻に涙がにじんでいた。

「ありがとうね」

(つづく)